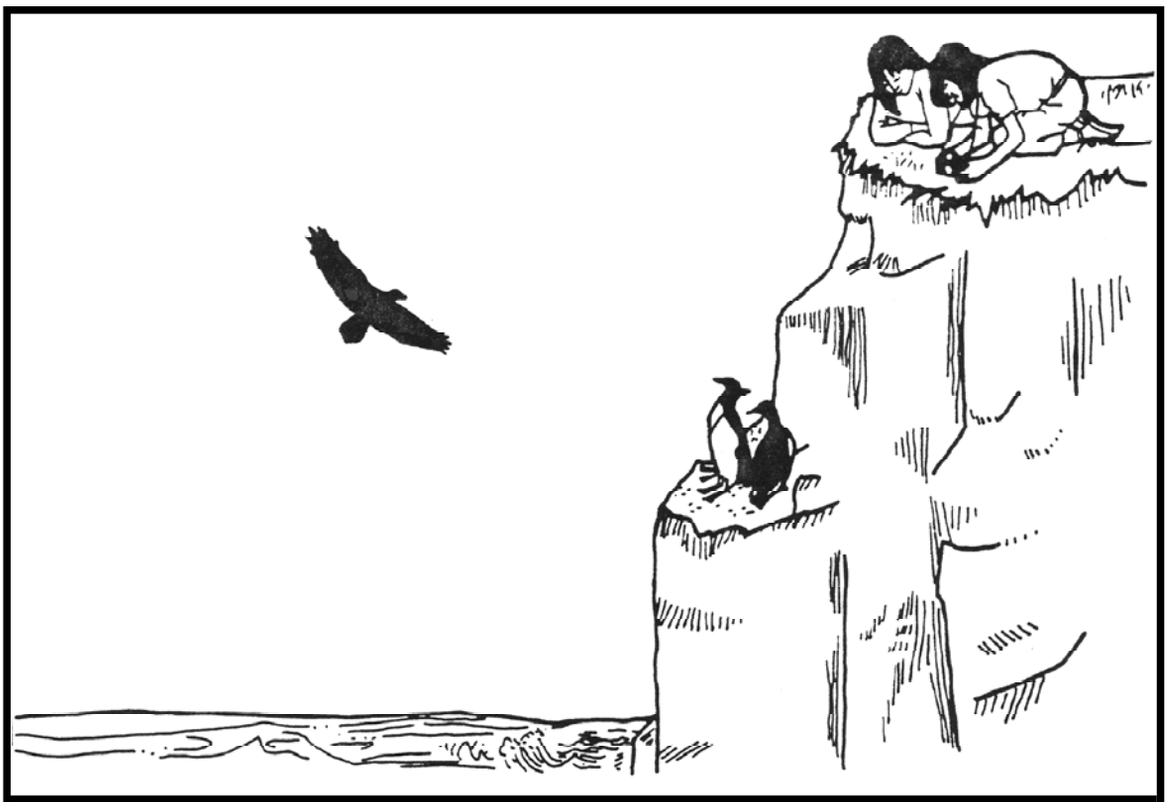
バードウォッチングに出かけよう



手順

１．　クラスの子供たちに「バードウォッチングに出かけよう」の出演者の役を割り当てます。彼らの役割は、自分の役の名前が呼ばれたときに、自分のせりふ（かっこの中の言葉）を言うことです。

出演者

野生動物写真家	(はい、チーズ、カシャ)
ミツユビカモメ	(キティウェイク、キティウェイク)
波	(ザッパーン、ザッパーン)
ツノメドリ	(ツノメドリのように、とてもすばやく静かに、腕をパタパタさせる)
ワタリガラス	(カー、カー)
ウミガラス	(オロローン、オロローン)
風	(ヒュー)
海鳥のフン	(うーｘｘｘｘｘｘっ！)（鼻をつまみながら)

２．　次のページに書いてあるストーリーを、出演者が効果音を入れるための間をとりながら、声に出して読みます。

バードウォッチングに出かけよう

　ある夏の日、友達と私は、とても早く起きて、〇〇（皆さんの村または町の名前を入れる）の近くにある、△△（地元の海鳥コロニーの名前を入れる）へハイキングに行く計画をたてました。友達は野生動物写真家（はい、チーズ。カシャ）になる決心をしたのです。夜明けに――まあ、実際は午前１０時ごろでしたが――私たちは出発しました。目的地に近づくと、ミツユビカモメ（キティウェイク、キティウェイク）の声がかすかに聞こえてきました。ミツユビカモメ（キティウェイク、キティウェイク）の小さな一団が、互いに呼び交わしながら、私達の方に向かって、頭上を飛んでいたのです。海に近づくと、風（ヒュー）が強くなりました。それは私達の顔に向かって真っ直ぐに吹き付けていて、とても爽快でした。風（ヒュー）が海鳥のフン（うーｘｘｘｘｘｘっ！）の生臭い臭いも一緒に運んでくることを除いては。私達は自分たちが海鳥の大きなコロニーに近づいているとわかりました！ 海鳥のフン（うーｘｘｘｘｘｘっ！）は本当に臭かったけれども、私達は海鳥のフン（うーｘｘｘｘｘｘっ！）が周りを取り囲む海のよい肥料になることを知っていました。

　私達は、あまりへりに近づき過ぎないように注意しながら、ゆっくりと崖の頂上まではい登りました。へりからおそるおそる下をのぞくと、波（ザッパーン、ザッパーン）が下の方の岩にぶつかっているのが見えました。私達は安全な場所を見つけて座りました。野生動物写真家（はい、チーズ。カシャ）である友達は、カメラを準備しました。私達の左側には、ウミガラス（オロローン、オロローン）の一団がまるごと、狭い断崖の岩棚に、ひしめき合って立っているのが見えました。それはまるでウミガラス（オロローン、オロローン）が互いに冗談を言い合って笑っているように聞こえました。ちょうど私の友達の野生動物写真家（はい、チーズ。カシャ）が、ウミガラス（オロローン、オロローン）の写真を、今まさに撮ろうとしていたその時、一羽の大きく、真っ黒なワタリガラス（カー、カー）が飛んできたかと思うと、風（ヒュー）に乗って空高く舞い上がりました。ワタリガラス（カー、カー）は、崖で営巣している海鳥を捕らえることができる数少ない捕食者のひとつです。ワタリガラス（カー、カー）は夕食を探していたのです。ウミガラス（オロローン、オロローン）は驚いて岩棚から飛び出し、波（ザッパーン、ザッパーン）の上に向かって飛んでいってしまいました。今日はワタリガラス（カー、カー）にとっては良い日ではなかったようです――卵をひとつも見つけられませんでしたから。

　突然、友達の野生動物写真家（はい、チーズ。カシャ）がひどく興奮しました。彼女は一羽のツノメドリ（腕をパタパタさせる）が私達の方に向かって飛んでくるのを発見したのです。わたしはつい笑ってしまいました。なぜならツノメドリ（腕をパタパタさせる）が、短くずんぐりした羽と、小さな丸っこい身体で一生懸命羽ばたくさまが、鳥と言うよりも、ジャガイモが飛んでいるように見えたからです！しかし友達が言うには、羽があんなに短いから、ツノメドリ（腕をパタパタさせる）は水中で上手に泳いで魚を追いかけ、捕まえることができるのだ

そうです。私はびっくりしました。想像してみてください。あのツノメドリ（腕をパタパタさせる）が波（ザッパーン、ザッパーン）の下を飛ぶなんて！

私の友達の野生動物写真家（はい、チーズ。カシャ）は、ツノメドリ（腕をパタパタさせる）が私達のそばの崖に着陸する時に、良い写真が何枚か取れたので、とても喜んでいました。実際、彼女はあまりたくさんの写真を撮ったので、まもなくフィルムがなくなってしまいました。最後に、わたしたちはただ草の中で仰向けになって空を見上げました。風（ヒュー）が顔の上に吹き付け、海鳥のフン（うーｘｘｘｘｘｘっ！）の臭いはまだしていました。それでも、信じられないかもしれませんが、私達はちょっぴりその臭いに慣れてしまっていたのです。見ていると、太陽が沈むに従って、空がピンクや金色の美しい夕闇へと変わっていきました。ミツユビカモメ（キティウェイク、キティウェイク）がもう一群れ頭の上を飛んでいき、私達は彼らにさようならと手を振りました。海鳥たちと素晴らしいひとときが過ごせて、なんて素敵な日だったのでしょう。

※翻案：米国魚類・野生生物局、「湿地と野生生物」より